



地方騎士ハンスの受難 4

Q L P H Q L I G H T

アマラ
AMARA



アルファライト文庫

主な登場人物 Main Characters

ケンイチ

一人目の日本人。農業高校出身で、凶悪な魔獣を手懐ける能力を持つ、粹なボンバードル男。北海道出身。

キヨウジ

二人目の日本人。オタクで気弱な性格の高校生だが、どんな怪我でも回復させる魔法が使える。東京都出身。

ムツキ

六人の日本人。
火・水・風・土の四つの魔法を操る、
ちょっとオタクなお騒がせ魔法少女。
埼玉県出身。

コウシロウ

四人の日本人。
元極道にして千里眼の能力を持つ料理人。
静岡県出身。

イツカ

五人の日本人。ダンジョンマスターとして無生物にあらゆる機能を付与できる。酒豪。鳥取県出身。

ハンス

本編の主人公。都では“魔術師殺し”的異名を誇る凄腕騎士団長だったが、貴族間での政争に背を向け、自ら辺境の地方騎士に志願する。

レイン

ハンスを異常に慕う元部下の女騎士。普段は仮面のような無表情だが、実際は、感情の浮き沈みが激しい。

ナナナ

新たにトリップして来た七人の日本人。様々な便利アイテムがポイントで買える不思議なカタログを持つ。???出身。

ミツバ

三人目の日本人。外見は可愛らしい美少女だが、大食い&怪力が自慢のトラブルメーカー。島根県出身。

1 視察に来た男

春祭りも過ぎ去り、季節はすっかり夏へ移り変わっていた。

気温も日に日に上がり、何もせどとも汗ばむ陽気が続いている。

そんなうだる暑さのある日、ケンイチの牧場にある従業員食堂にイツカの姿があつた。

普段はスウェットっぽいラフな恰好で牧場中を徘徊しているイツカだったが、その日は珍しくパリッとした服装をしていた。

ノリの利いたジャケットに、揃いのパンツ。

白シャツと、落ち着いた柄のネクタイ。

いつもはザンバラにしている髪の毛を後ろで一つに結わえた姿は、まるでやり手のOLのよう見えた。手鏡で髪の毛やネクタイなどをさつとチェックすると、イツカは満足そうに頷く。

「ま、こんなもんでしょう」

そんなイツカの様子を眺めていたキヨウジが、感心した声を上げる。

牧場の従業員寮で生活している者にとつて、この食堂は共用の居間のような扱いになつている。

キヨウジの反応に気を良くしたのか、イツカはやりと笑う。

「キマツてるでしょ？」

「たしかにキマツてますけど。よくそんなものの用意できましたね」

「作つてもらつたのよ。型紙とかは自前だけど」

この世界にスーツのようなものがあるのか定かではないが、少なくとも彼らが暮らしていいる地方には存在していなかつた。

となれば当然、今イツカが着ているのは自前で作つたものに違ひない。

だが、^{あずか}自ら型紙を用意するとは驚きだ。

そのためには、少なからず専門的な知識や経験が必要なはずである。

「イツカさん、そんなことできたんですね。裁縫(さいほう)とか絶対無理そうに見えますけど」

「女子力低いつて言いたいのかしらこの野郎。まあ、つつても自分で習おうと思つたんじやなくて、覚えさせられたんだけどね。親戚にテーラーやってるのがいてさ。無理やりバイトさせられたの」

「テーラー!? 紳士服の仕立て屋さんですか!?」

「そーよ。手伝わされたの」

痛くなるつたら

「うわ、凄く似合わない」

「うつせ！ この食堂のお花を生けているのは、誰と心得るかこのバカチンが」

食堂のテーブルの幾つかにはフラワー・アレンジメントめいた生け花が置かれているのが、実はすべてイツカの手によるものだつた。

見た目によらず、イツカは地味に様々な分野に特技を持つ系女子だつた。

「ていうか、なんでそんなかつこうしてるんです?」

「なんでつて。今日、ダンジョンの視察の日でしょ?」

この日は、ロックハンマー候爵領主館から派遣された調査官が、イツカのダンジョンへ視察に訪れるになつていた。

春祭りの一件で捕らえられたムツキのための牢獄や、最近設置された新しいトラップの確認をするためだ。

ゴーレムやトラップを作るなど、イツカの能力はとにかく汎用性が高く、大きな危険が確認をするためだ。

ともなう。そこで、ムツキの牢獄が正式に設置されたのを機に、定期的に視察を受けることになったのだ。

どんなものがあるのか、どんな活動をしているのか。

ロツクハンマー侯爵側としても危険性などを把握しておきたいところだろう。

イツカも、自分には危険や反抗心はないとアピールできる絶好の機会だ。すべて包み隠さず見てもらい信用が得られるなら、万々歳である。

「午後からでしたつけ？」

「そう、今日の午後から。視察は今回が初めてだからね。気合いを入れないと」

何事もはじめが肝心、という訳で、イツカはスーツを新しく作ったのである。

「そのために作つたんですか、それ」

「そうそう。やっぱりこういうときはスーツでしょ？ 公の場に立つときは暗みついですか。礼儀つていうか、万国共通つていうか。スーツは戦闘服、みたいなところあるじゃない？」

確かに、それはありますよね。正装つてわけじゃないんですけど、勝負服つてイメージはありますし。まあ、その服装が大事なお客を迎える際のきちんととした服装だつて通じるか分かりませんけど

「へ？ なんで？」

不思議そうな顔をするイツカに、キヨウジは肩を竦めて言葉を続ける。

「だって、この地方、スーツないわけですし」

イツカは僅かに眉を顰めた。額に手をやり暫く考えると、真剣な様子で顔を上げる。

「しまつた、そうだつた。どうしよう」

「まあ。ピシッとした印象は与えるでしょうし。いいんじゃありません？」

呆れたようく笑いながらも、フォローを欠かさないキヨウジであった。

ところで――。

ハンス達の暮らす街には、大型の宿泊施設がない。

それゆえ、ムツキを監視するために街に派遣された兵士達は、ケンイチの牧場の従業員寮で寝泊まりをしていた。苦肉の策だが、どうせ監視対象のムツキは牧場に居るので、かえつて都合がいい。

ケンイチの「大は小を兼ねる」という考え方から、従業員寮はやたらと大きく作られている。

空き室もまだあるため、兵士達が泊まつても余裕があるので。

今回派遣されてきた視察官も、従業員寮に宿泊していた。

その頃、件の視察官が泊まつている部屋の前に立ち、ハンスは疲れたような溜め息を

吐く。

半歩後ろに立っていたレインが、きづかに声をかけた。

「どうかしましたか？」

「いや。何でこうなってるのか、と思つてな。俺はただの地方騎士で、本来なら田舎に引つ込んで余生を過ごしているだけのはずだつたんだがなあ」

「ついぶん今更なことですね」

「未練らしいと思うかもしれないが、俺にとつては大問題なんだよ」

ハンスの元に『にほんじん』という妙な能力を持つた連中がやつて来てから、もう随分時間が経つた。

ケンイチ、キヨウジ、ミツバ、コウシロウ、イツカ、ムツキ。

彼らにハンスは、どれだけ振り回されたことか。

地方の田舎町に引っ込んで、生家の目の敵にならず平々凡々と生きしていくはずだったのだ。

「それが、何でこんなことに」

「案外、それがハンス様の能力、なのかも知れません」

不思議そうに眉を顰めるハンスに、レインは普段ほとんど動かさない眉を少しだけ上げてみせた。

「厄介事を呼び込む能力」

「勘弁願いたいな。心底要らんぞ、そんなもの」

そんな能力ないだろうとは思うものの、ハンスは完全に否定できなかつた。

今までの『にほんじん』の常識の逸脱っぴりは、そう思わせるに足るものだつたからだ。

もしや、本当に自分にはそんな力があるのではないだろうか。

そのせいで生家から疎まれ、戦争では厄介事ばかりに当たり、それから逃れるために必死でここまで来たのにもかかわらず、また厄介事に出くわしているのでは?

被害妄想としか言えない考えを、ハンスは頭を振つて追い出した。

あなたがち妄想だけとは言えないところが恐ろしいが、今はそれよりも目の前のことどうにかしなければならないのだ。

「まったく、隣国といい『にほんじん』といい。厄介事だらけだな」

隣国とは、ハンスの国と隣り合う國の中でも、この街にある国境と接する国を指している。

ハンス達の国が先だっての戦争で勝利して以降、お互いの関係は落ち着いてはいた。

当然、あれやこれやと嫌がらせや謀報合戦は続いていたのだが、それは隣り合う国同士であれば当たり前のことだ。

だが、そんな両国間の関係が、最近俄かにきな臭くなり始めているのだ。

なんでも、隣国に行つたハンスの國の外交官が突然、隣国に有利になるように動き出し

たとか。

戦争で負けて縮小したはずの軍隊が、拡大方向に向かっているとか。

以前、ハンスの街を脅かした魔獣の技術が急速に進み、既に実戦配備されているとか。

普通、敗戦国というのは、暫くは大人しくしているものである。

にもかかわらず、これだけあれこれと動いているとなれば、下手をすると、またぞろ戦争などということになりかねない。

そうなつた場合、損をするのはハンスの国と戦力の差がある隣国なのは明らかなはずだが。

「案外、ハンス様が隣国との国境近くに居るから、そういうことを呼び寄せているのかもしれません」

「ほんつとうに。勘弁してくれ」

苦虫でも噛み潰したような顔で弱りきった声を出すハンスに、レインは肩を竦める。

普段通りの無表情だったが、付き合いの長いハンスにだけは、僅かに楽しげであること

が見て取れる。ハンスはそれを見て、疲れたようにがっくりと頃垂れたのだつた。

さて――。

今回派遣された視察官は、ハンスも顔を知つてゐる人物であつた。

セブエル・ブラハン。

ロックハンマー侯爵が持つ軍の兵士で、百人長という地位に居る人物である。

ゴーレムを作り、土や石などを操る魔法の使い手だ。

少し言葉を交わした機会もある。快活で気持ちのいい男だった。気取つたところがなく、泥臭いとも言える印象をハンスは記憶していた。

「いや、お待たせして申し訳ない！」

宿泊用にあてがわれた部屋から、セブエルは小走りで慌てたように出て來た。

手には書類束と、筆記用具が抱えられている。いかにも戦場の似合う兵士といった大柄なセブエルが文官のようにそれを持つてゐる様子は、どうにも不釣合いに見えた。

申し訳なさそうに言うセブエルに、ハンスは笑いながら首を振る。

「まだ余裕もありますから、焦らなくても構いませんよ」

「書類仕事というのは、どうにも苦手でしてな！ 視察のチエック項目を確認しております

したら、すっかり遅くなつてしましました」

「セブエル殿もですか。私も机の前に座つてゐるのが苦手でして。それならば教練のとき

に習つたようなことで身体を動かしている方が、ずいぶん気が安らぐ性質なのですよ」

「然り！ ハンス殿もですか！ 私が教練を終えたのはずいぶん昔ですが、教官にどうされたのは未だに覚えておりますよ！ そう、曰く」

「死なないように、死ぬ氣で体力をつける」

異口同音にそう言うと、ハンスとセブエルはお互に大きな声を出して笑った。

この手の会話は、兵士の間では定番のやり取りだ。

同じ苦労を味わつた者同士だと確認し合うことで、絆を深める意味がある。

顔を合わせて早々、あたかも一緒に心中するような作戦に組み込まれるかもしれないのが、兵や騎士というもの。初見でもこうしてバカ話で盛り上がり、息を合わせるのもまたが、「戦商売」なのだ。

そういった意味で、この二人は今、恐ろしく戦場臭い会話を交わしていることになる。

二人がひとしきり笑い終えると、レインがハンスへ声をかけた。

「ハンス様、そろそろ」

「ああ、そうだな。セブエル殿、ご案内します。こちらへ」

ハンスは先頭に立つて歩き始めた。向かうのは、イツカのダンジョンの出入口だ。

従業員寮を出て街の方へ続く道に進んで行くと、すぐに大きく開けた平らな土地が現れる。

山間にあるにもかかわらず、四角く整地されたそこには、無数の巨大な人型が立ち並んでいた。

隅の方には、木を組み合わせた箱舟のような物体も置かれている。

そこは、イツカがゴーレムを作り、保管しておくための場所なのだ。

立ち並んでいるのは、どれも完成品か、試作段階のゴーレムである。
自身もゴーレムを使うためか、セブエルは興味深そうに幾つもの巨体を眺めた。

「いやいや、ここに来たときも拝見しましたが、人の手が入っているだけあって見栄えがいい！」

正に質の良い鎧の如くですな

立ち止まつたセブエルが、一体のゴーレムを見上げて感嘆を漏らした。

全身鎧を纏っているような、身の丈五メートルを超える巨人。

その迫力たるや、かなりのものだ。

見慣れない異国風の外見もあり、セブエルを噫らせる。

ただ、実は日本人の転生者であるレインは、別の感想を持っていた。

(口ボッぽい。それも、リアル系の)

そう、キョウジとイツカがデザインに参加したゴーレムの外見は、どこまでも日本のアニメに登場するロボットっぽいものだったのだ。

確かに唸るような外見だろう。

日本が何十年もかけて作り上げたサブカルチャーの一端なのだから。

一人、生暖かい気持ちになつてているレインをよそに、ハンスとセブエルはしきりに感心した様子である。

「ゴーレムにも驚きますが、あの鳥カゴにも度肝どがくを抜かれました」

「ああ。確かに私も最初は肝が冷えましたよ」
今回セブエルは、ロックハンマー侯爵領から鳥カゴに乗つて移動して来ていた。

馬を使つても五日はかかる移動を、鳥型の魔獸が運ぶ鳥カゴならば一日もかからない。

キョウジの提案で作られたそれは、この世界では画期的かつきてきな移動手段であった。

今は改良を重ねている段階であり、将来的にはロックハンマー侯爵領主館とこの街の間で定期便を飛ばす計画もある。ムツキの監視のために兵士が往来しなければいけない事情もあり、かなり前向きに検討されているようだ。

ロックハンマー侯爵という人物は、新しいものを取り入れることに躊躇ちゆうちよのない性格であつた。

「はつはつは！ 自分は高いところが好きでしてな。なかなか楽しい経験をさせていただきました！」

鳥カゴにはガラス窓が取り付けられているため、外の風景が見られる。

確かに高いところが得意ならば、貴重な経験だろう。

「来るときも上からこの場所を眺めましたが、いやあ、壯觀そうくわんでした」

鳥カゴの発着場があるこの場所を、セブエルは上空からじっくりと眺めていた。
石材や鉄でできたゴーレムが並ぶ様さまを上空から目にすれば、確かに迫力がある。

「並んでいるだけでも庄卷あつかんですかね。これが動き出すとまた威圧感いわくわんが違いますよ」
「それはそれは！ 一度は見てみたいのですな！」

ゴーレムの前から離れ、三人は再び歩き出した。

敷地しきちの中央付近に近づくと、地面の上に何かが描かれているのが分かる。

その周囲にだけはゴーレムも置かれていない。意図的に空けられているようだ。

地面には白い石灰せいかいのようなもので円が描かれ、中央には「鳥」という漢字が書かれている。
それは、鳥カゴ用の発着場だった。セブエルが降り立つたのも、この場所である。

「ここから、ダンジョンに降ります」

ハンスの言葉に、セブエルは怪訝けいげんそうに首を傾げた。

「はて、たしか件のイツカ殿の能力で作られたダンジョンというのは、地下にあるのでしたな。そこへ降りられるような穴は見当たりませんが。何か仕掛けがあるのでしようなあ」
一体、何が起こるのかいかにも楽しみだとといった様子で、につかりと笑う。
そんなセブエルの顔を見て、ハンスは苦笑する。

「そういうのは思つていても言わぬが花ではありませんか？」 驚いて見せるのも度量どりょうで

「いいや、ご推察お見事」
「おお！ 確かに！ これはこれは、育ちの悪さが出てしまいましたな！」

セブエルの声を搔き消すような大きな声が、地面から響いた。

正確に言うなら、円と鳥の文字があつた場所だ。

目を見張るセブエルの前で、それは僅かな地響きを上げながら動き出した。

地面に描かれた円と鳥のマークが、地面ごと持ち上がり始めたのだ。

円と鳥の文字は真つ二つに割れ、その下から巨大な柱に似たものが見えた。

それが指であり、二つに割れた円が、まるで盾のように巨大な腕にくくりつけられたものだと分かる頃には、巨大な人型の全身が三人の前に現れていた。岩や鉄を組み合わせて作られたその異形が立ち上がった足元には、下へ続く穴と階段があった。

階段には、下から上がつて来る人の姿が見て取れる。

スーツに身を包み、にこやかな笑みを浮かべるイツカだった。

「普段は腕をすこおしげて、その間から中に入るんですけどね？ 今回は視察官さんがいらっしゃるということで、ちょっとパフォーマンスを」

足の先から頭の上まで、軽く十メートルは超えているだろう。

イツカはその足元に立ち、ゴーレムをペチペチと叩く。

「コレは出入口兼見張り番のゴーレム。守屋守くん一号でつす。ゆるきやらっぽくはないけど、よろしくどーぞ！」

お手本のような營業スマイルを浮かべ、イツカは恭しくお辞儀をした。

妙に芝居がかつたその態度に、ハンスは嫌な表情を浮かべ、セブエルは面白そうに唸る。「はつはつは！ コレは驚いた！ 噂には聞いていましたが、実物を前にすると血が滾りますな！」

「あつはははあー。まあ、いうてもコレが一番の目玉なんですけれどもね？ うちで一番の大仕掛け、コレなんで。出オチってやつですよ」

苦笑しながら、イツカはゴーレムの足元を離れ、セブエルの前に立つた。

セブエルもそれを迎え入れ、お互に礼をする。

「セブエル・ブラハン様。ようこそお越しくださいました。能力を使ってこの牧場で働いております、スマ・イツカと申します。担当は地下に広がる不思議空間の維持と設営管理。まあ、要するに全部ですね！」

「歓迎、痛み入ります。自分はセブエル・ブラハン百人長。今回、貴女のダンジョンを視察することになった者です。とはいっても、おおよそは書面でご説明いただいておりますからな！ 自分はただ見学をしに来た、いってみれば形だけの確認なのですよ！」

「それはそれで怖いですねえ。なにせ私パンジーですから。お役所の書類仕事って、どいつもアレで！ なんならハンスさんにおん投げちゃおうかと思つたんですけど、それやつちやうとレインさんにしこたま怒られそうだつたもんでえー！」

イツカの顔が若干引きつっているのは、レインに凝視されているからだろう。

無表情なので感情は読み取れないが、背中から発散されるオーラが大変な事態になつて
いる。

ことハンスが絡んだ場合、レインは凄まじい力を発揮するのだ。

触らぬ神に祟りなし、である。

「ま、それでも内容はきつちり揃えてるはずなんで。どうぞ存分にご確認ください」

「ええ、そうさせていただきましょう！」

「あ、それと」

思い出したというように、イツカはぱんと手を叩いた。

「先ほども言いましたけど、私ゴクゴクありふれた一般家庭の出なもんで。こちらのしきたりとか流儀とか知らないんですけど、何か失礼なことあつたら教えてくださいね？」

一応、セブエルはロックハンマー侯爵の指示を受けてこの場に来ている。

その人物に対して非礼があれば、つまりロックハンマー侯爵に無礼を働いたことになつてしまふ。

普通ならば、礼を失しないように礼儀作法に詳しい人物を案内役に立てるところだが、今回はそもそもいかない。なにしろ、イツカのダンジョンマスターとしての能力は特殊すぎて、その全貌を正確に説明できるのはイツカ本人とキヨウジしかいないのだ。ダンジョンを製作するだけでなく、長期間にわたつてそれを維持しながらゴーレムなどの無生物に

様々な機能を付与できるイツカの能力。下手な説明をすれば、国にどう受け取られるか分かつたものではない。

そのため彼女の後見としてハンスとレインが居るわけだが、それでもサポートしきれるとは限らない。

だが、イツカのそんな心配は、セブエルの笑いで吹き飛ばされた。

「なに、心配は無用です！ こちらとしても貴女方のご事情は把握しておりますからな！ 礼儀など気にする必要はありません！ それに、実は私は農家の出でしてな！ 魔法を見込まれて兵士になつた口ですので、私もずいぶんと礼儀を知らんのです！」

「あー、そなんですかー！ そりやー、では、お言葉に甘えさせていただくということで、ひとつよしなにお願いしますー！」

快活な笑い声を響かせるセブエルに、イツカはペコペコ頭を下げる。

なんともこなれたその動きは、日本人特有の「OJIGI」だった。

挨拶を終えたところで、イツカは下へ降りる階段の方に足を向けた。

「では、早速ご案内します。ハンスさんもレインさんも、楽しみにしててくださいねん」

「ん？ 僕達もか？」

突然名指しされて、ハンスは首を傾げる。

イツカはニヤリと笑顔を作り、何故かVサインをして見せた。

21 地方騎士ハンスの受難 4

「だって、私の能力がレベル2になつてから初めてじゃないですかあー。ダンジョン入るの」異世界にやつて来た当初から日本人達の特殊能力はとてもなかつたが、実は最近になつてさらに強化されているらしい。

「レベル2」と呼ばれる状態を最初に経験したのは、ケンイチだ。

魔獣使いのケンイチには、「魔獣と対しているときだけ超人的な力を発揮できる」という能力があつた。だが、レベル2になり、「當時超人的な能力を発揮できる」ようになったのだ。さらにケンイチに次いで、キョウジとイツカも「レベル2」へアップしていた。

「おつたのしみにいー」

「無茶はしていいだろうな」

意味ありげにニヤつくイツカに、ハンスは表情を引きつらせた。

一応どんなものを作り、設置したのかは、新しいものが出来上がるたびに書類で報告されている。だが、見ると聞くとでは大違いというやつだ。どうせ視察するのだから、そのときに一緒に確認すればいいとハンスは考えていた。だが、それは間違いだつたかもしれない。

それを察してか、それとも何も考えていないのか。

イツカは至極楽しそうな足取りで階段の前まで歩いて行き、くるりと振り返った。

「さあ、どうぞ。私のダンジョンへ。って、一回言つてみたかつたんですよねー」

妙にニヤつきながら言うイツカに、ハンスは底知れぬ不安感を覚える。

いつそのまま帰つてしまいたいとは思うものの、当然そんなわけにもいかない。

ハンスは諦めたようすに溜め息を吐き、わくわくとした表情のセブエルの後についてダンジョンに入つて行つた。

2 視察をする男

ダンジョン内の通路は広く、屋根もかなり高く作られていた。

壁面や床は何か強い力で圧縮されたように平らにならされており、滑らかだ。

天井近くには光の球らしきものが飛び交い、それが通路内を明るく照らしている。セブエルは驚いて、その光の球に目を凝らした。

よくよく見れば、光の中心に虫のようす羽の生えた小さな人型のものが居るのが分かる。

「これは、妖精ですか！ 魔力の多いところに集まると言聞いていましたが」

「私のダンジョンは、通路とか壁面に魔力を蓄えてましてね。妖精達に言わせると魔石鉱山と似た環境らしいんですよ」

既に見慣れているハンスとレイインも、改めて感心した表情で妖精達を見上げている。

「最初は溜め込んだ魔力を掠め取っているのかと思つたんですが、どうもそういうことじゃないらしくですね」

「ほお。魔力に集まるが、魔力を使つているわけではない。ということですかな?」

「みたいですね。連中にとつての魔力は、魚にとつての水、みたいなもんらしいんですよ。

消費するわけじゃないけど、生きていくのに必要なもの、みたいな」

イツカの持ち出したたとえに、セブエルは納得した様子で頷く。

「私達にとつての空気、のようなものですか。しかし、それ以外の場所でも妖精は見かけますな」

「当人達によれば、一日二日なら離れていられるそうです。それ以上になると、苦しくなつて存在が保てなくなるんだとか」

「なるほど。数日ならば大丈夫だと。ずいぶん丈夫なものなのですね」

セブエルは唸りながら腕を組んだ。そして、今度はふと壁面の方に眼を向ける。

その傍に寄り手を這わせると、感心しつつ顔を近づけた。

「よく固めでありますな。かなり強い力で固めたようですが」

「ダンジョン内の整備や、建築、建設専用のゴーレムが居ましてね。彼らにやつてもらつてます。こういう仕事だけなら、人間よりも上手いですよ」

「そのためには、作つたゴーレムならば、人よりも優れているというのも頷けますな」



豪快に笑いながら、セブエルはしゃがみ込んで床面にも手を這わせる。

まるで石畳のようになり硬く固められた。表面は土色で、直接手で擦ると、さらと僅かずつ削れてくる。壁面と同じく、土を固めて作つてあるのだろう。

「ただ掘つて固めた、というわけではなさうですな。どこから土を持ち込み、表面を加工したように見受けますが」

「お、分かります？ 近くの山にキメの細かい良い土が出るところがありましてね。そこから拝借して表面だけ固めています。見た目だけじゃなく、そうすると頑丈になるみたいでして。ここはゴーレムも通りますから。頑丈な方が良いんですよ」

「広さと高さがあるのはそのためですか」

納得した様子で、セブエルは頷いている。

イツカはそんな彼を促し、奥へ進んでいく。

「まずご案内するのは、ゴーレムのコア保管庫です」

「資料を拝見しましたが、イツカ殿が作るゴーレムの心臓部になるものだそうですな」「そうですそうです。セブエルさんのゴーレムには、要らないんでしたよね。うらやましいなあ！」

「はつはつは！ 確かにそいつたものは要りませんな！ しかし、通常一人が制御できるゴーレムは数体が限度。私など、一体だけですからなあ！」

セブエルが言うように、複数のゴーレムを同時に制御できる魔法使いは少なかつた。

火を起こしたり、矢を出したりといった、いわゆる飛び道具的な魔法は、一度発生させてしまえばそれだけで魔力の消費は終わる。

それに対し、ゴーレムのように形状の維持が必要な魔法は、魔力を継続して消費し続けなければならない。そのため、一般的な遠距離攻撃魔法よりも、ゴーレムを操る魔法は高度、且つ、消耗が激しいとされている。術者によるが、軍人でもない限り一日三時間から四時間が限の山だ。

長いと感じるかもしれないが、多くの場合、ゴーレムの使用目的は日本で言つところの重機や車両に相当する。したがつて、三時間から四時間にわたつて使用されるのは普通なのだ。

「確かにそういう意味では、便利かもしれないませんねえー。ただ、その分下準備が大変でして。その一つが、コアなんですねども」

そんな話をしているうちに、目的地に着いたらしいのだ。

廊下に面した横開きの扉の前に立ち、イツカはひらひらと手を振る。

すると、扉が独りでに横へスライドした。

イツカは扉が開ききるのを確認もせず後ろへ振り返り、視線を上げる。

ちよいちょいっと小さく指を動かすと、数匹の妖精がそれに気がつき、扉の中へ入つて

いく。

一連の流れを見ていたセブエルは、「ほお！」と声を上げた。

「その扉もゴーレムですか！」

「ですです。妖精さん達を呼んだのは、まだ中が薄暗かつたもんで。さあ、どうぞこちらへ」

イツカに促され、セブエルは扉を潜る。

そのまま後ろから、ハンスとレインも続く。

廊下は、実に殺風景な作りになっていた。家具などは設置されておらず、壁と床、天井だけの四角い部屋だ。内部は学校の教室よりも僅かに広いほどだろうか。天井までの高さは、廊下と同じ程度だ。

入口の扉の丁度正面の壁にまた奥へ続く扉が付いており、その左右には二体ずつ、合計四体の金属甲冑が見張り兵のように佇んでいる。

「この部屋は、コア保管庫の前室です。運搬を担当するゴーレムは保管庫内には入れないことにしているので、ここで受け渡しなどを行います」

「そして、警備のゴーレムを常駐させておく場所でもあるわけですか？」

セブエルの質問に、イツカは笑いながら頷く。

四体の金属甲冑を、セブエルはゴーレムだと判断したようだ。もちろん、それは正しい認識である。

「廊下に立たせておくのも邪魔ですしね。このゴーレム達の目はジャビコにも繋がつてますから、監視も楽ですし」

ジャビコというのは、真っ黒なボーリング玉に似たイツカの能力を管理する外部記憶装置で、いわばコンピュータのような存在だ。

「視覚を共有、ですか。それは恐ろしいですね！」

居並ぶゴーレムの横を通り、イツカは一番奥の扉を開ける。

その内部は、金属棚の並ぶ、広大な空間であった。

「天井までの高さこそほかと変わらないものの、広さは段違いだ。

「ここが、コア保管庫です。といつても実際は材料の保管、組み立てなどもここで行つていますので、正確にはコア研究室、つてところですかね？」

「となると、ここに載っているのはすべてコアの材料や、コアそのものですか。拝見してもらいたい？」

「もちろん、どうぞどうぞ」

セブエルは棚の一つに近づいて、並べられた品に目を落とす。

木材、骨、石材、そのほか得体の知れない塊が、無節操に並んでいる。ざつと見渡す限り、ほぼすべての棚に何かしらの品が載せられていた。

「これらすべてコアの材料なのですか？」

「魔力の通しがよければ、なんでも材料になるもので。あ、肉とか血とかのナマモノ系以外の生体は無理なんですかね？」木材とか骨とかなら大丈夫みたいなんんですけど。基準は私にもよく分かりません」

「はつはつは！　なるほどなるほど！」

豪快に笑うセブエルに、イツカは苦笑しながら頭を搔いた。

「コア本体をご覧に入れましょう。奥になります、どうぞこちらへ」

仕草と言葉で奥へ促しながら、イツカは先頭に立つて歩き始めた。

その間に、まるでガイドのように材料について説明する。

「これらの材料は、ケンイチさんところの魔獣さん達や、ゴブリンさん達自衛隊、うちのゴーレムなんかが収集してきます。何が使えるか分からないんで、結構手当たり次第に収集してもらっています」

言葉通りなのだろう。左右の棚を見れば、並んでいる物の共通点のなさが分かる。

何かの金属片や紙屑のようなもの、粉っぽい何かの塊。結晶のような鉱物に加え、薬品のようない粉など。

「本当に、いろいろなものがありますな」

「あははは。確認しないと何が使えるか分からぬんですから、はい」

イツカが笑い声を上げていると、前方の棚の陰から何かが現れるのが見えた。

足音から何かが接近していることには気がついていたらしく、セブエルを含め誰の顔にも驚きの色はない。

それは、金属製の全身鎧だった。

先ほど扉の前で並んでいたゴーレムと同じものが、歩いているのだ。

「おお！　これはこれは！」

「コア保管庫内部は、常に四体のゴーレムが警備に当たっています。まあ、ここで暴れられたら困るんで、念のためいる程度でしかないんですけど。外に並んでいるゴーレムと、日に三回、入れ替わります」

「交代制ということですね」

「そうです。まあ、ゴーレムなんで本来そういうのは要らないんですけど。気分ですね」生物ではないゴーレムには、休憩も気分転換も必要ない。

不必要な行動だけに、本当にイツカの気分の問題なのだろう。

日本警察風の敬礼をして去つていくゴーレムを見送り、一同は再び歩き始める。

「ちなみに、イツカ殿。換気などはどうしておいでなのでですかね？」こういう場所では必ず、「外から空気を取り込むものと、外へ送り出すもの。その二つの換気ダクトを張り巡らせています。これは極小さなもので、妖精さん達の通り道にもなっています」

妖精は掌サ イズで、それが通れる程度ならば、ダクトの大きさは高が知れているだろう。なるほどと頷くセブエルに、イツカは説明を続けた。

「それなら人は侵入できないですし、入つて来たとしても虫や小動物でしようからね。一応そういったものを駆除するためには、小型のゴーレムを徘徊させています」

「その小型ゴーレムも監視の目の一つ、ということですかな？ なかなか厳重な警備ですね！」

「いやあー、ビビリなものんで」

「しかし、排気に、照明の維持。施設建設から、防衛警備。なるほど、イツカ殿の能力は正に拠点を作るものなのですな」

いたく感心しているセブエルに、イツカは困ったような苦笑を浮かべる。

確かに、かなり気合いの入った設備だ。妖精の通り道を確保した換気システムなども、細かく配慮が行き届いている。が、どれ一つとして、イツカが考えたものではなかつた。では誰が？ といえば、当然一人しかいない。キヨウジである。

この場所にダンジョンを作ると決めたのも、資材を集めたのも、設計立案をして図面を引いたのも、それらを現職の大工に見せて協力を仰いだのも、すべてキヨウジがやつたことなのだ。

イツカがしたことといえば、必死になつて頭を悩ませているキヨウジの横で、酒をかつ

くらつていた程度である。

「私は、ほつとんど何もしてないんすけどねえー」

「はつはつはー！ ご謙遜ですな！」

正に言葉通りなのだが、目の前の設備を見せつけられてそう受け取る人は居ないだろう。実情を知っているハンスは、じつとりとした視線をイツカに向いているが、特に何か言うつもりはないようだ。

「さ、着きました。この辺りの棚に置いてあるのがコアです。で、そこが作業机ですね」イツカはセブエル達を振り返り、左右に手を広げた。

背の高い棚が取り扱われたそこには、中央に大きな作業台が置かれている。

部屋の一番奥にあるらしく、壁に作り付けの棚が見えた。棚に四方を開まれた、不思議な空間だ。

その棚には、様々な形状のケースが並んでいる。

鳥かごに似た網で作られた金属ケースから、壺状の焼き物まで。サイズもまちまちで、それぞれに統一感はない。一応、同じ形状のものは、まとめて同じ棚に収納されてはいる。だが、隣り合つたものの材質はまったく別物であり、種類別に分けるなどの気配りをしている様子は見受けられなかつた。

「通つて来た棚にあつたような材料を、用途に合わせたケースに入れ、コアが出来上がり

ます」

手近な棚から、壺のようないいコアを取り出す。
蓋ふたと壺状の本体を繋いでいる金具はすを外し、イツカはその内容物を作業机の上に広げた。

転がり出たのは、鉱物の天然結晶と思しきものと、木片、そして、幾らかの骨片こつべんだ。

「基本的に、コアの内部には複数の素材を使います。なんか、最近になつていろいろ試してみたら、そつちの方が性能がよくなるみたいで。どんな組み合わせがいいかは、まだ実験中つて感じなんんですけどね」

「素材の組み合わせ、というわけですな。となると、それだけでも何万通り。分量も関係あるとすれば、気が遠くなりそうですね！」

「といつても、組み合わせの方向性はジャビコがおおよそ分かつてますし。実際に作らなくとも、シミュレーションはできますから」

イツカの言葉に、セブエルは感嘆し、質問を重ねる。

「ほお、実際に組み合わさずに推測できるのですか。便利なものですね！ それは今、どんですよ」

ジャビコの存在は、書類にもきちんと明記してあつた。

「こに？」

「管理室に置いてきました。あれはあれで、いろいろ仕事があるもんで。私よりも忙しいんですよ」

セブエルも、それがどういうものなのか理解しているようだ。

「このコアですが、メインはあくまで中身の方です。ケースの材質は性能に直接影響しません。ただ、ゴーレムの運用用途によつて、変えていきます」

「ほう！ たとえば、どのような？」

「建設、建築の場合は、鳥かご型などの金属の網目状あみめじょうのものを使います。ゴーレムの体内

にあるため、直接危険にさらされる恐れが少ないので、それでことが済むんですよ。全部金属屬にすると重いですし。戦闘用のゴーレムは、頑丈な金属の箱を使います。こちらは装甲こうじやうが破損した場合でも、コア自体を守れるようですね」

説明しながら、イツカはそれぞれのコアを棚から運び出し、作業机の上に並べていく。様々なものが詰まつた鳥かごや無骨むこつで頑丈そうな金属の箱などだ。

「箱状はこじやうの方は、確かに重そうですな」

「鳥かごの三、四倍じや利かないもので。戦闘用のガッチリしたやつにしか使わないことにしてます。値段的なことも含めて」

指で輪を作るイツカを見て、セブエルは思わず噴き出す。

「金がかかるのであれば、確かにそちらも気にしなければならないだろう。

「で、こつちの焼き物系は水に強いですから温気しつけの強い場所だつたりで使います。強度は落ちますが、さびてしまつたら困りますからね」

「そういったところにまで気を使われるのですか！ 私達の魔法ではそういったところは気にしませんからな！」

「下準備は大変ですが、まあ、セブエルさんの言つたように數を捕えられるのが強みですね」

「イツカのゴーレムは、活動可能時間がとても長い。

種類や使用状況によつても異なるが、長くて一ヵ月、短くとも二週間は無補給で連続稼動が可能だ。その後についても、ダンジョン内であればすぐさま魔力の補給ができる。

手間や準備は必要だが、それを補つて余りある効果が期待できるのが、イツカの能力なのだ。

「ここで作つたコアは、外のゴーレム置き場でボディと組み合わせて、ゴーレムとして完成させます。最近はボディは外注することが多いもんで、中に運び込む手間を省いてるんですね」

「外注というと、鍛冶師や石工に頼まれているのですかな？」

「ですです。プロに頼んだ方が成型が確かですし。なにしろでかいゴーレムもありますから」

外に並んでいたゴーレムの中には、高さ五メートルを超えるものもざらにあった。

ダンジョン内の天井までの高さはおよそ三メートルなので、中での組み立ては確かに難しいだろう。ちなみに、先ほどそれ違つた鎧のゴーレムは、高さ二メートルほどだ。

「ううむ。なんとも金のかかる話ですねなあ」

「あつはつはつは。そこだけはまあ、こだわり始めるとそうなつちやいますよね」

セブエルの言葉に、イツカは顔を引きつらせる。

実際、ゴーレムのボディには金がかかっていた。外注すれば、かなりの金額になるだろう。もつとも、それは普通に注文すれば、であるが。

「ゴーレムを貸し出す代わりにゴーレムのボディを作つてもらう、つてこともあるんですよ。材料はこっちで集めてますし、加工だけお願いする形で」

「なるほどなるほど。森や山の中で材料になるものを見つけさえすれば、力仕事はそれこそゴーレムの出番ですからな！」

笑いながら、セブエルは手に持つた書類にすばやくメモを書き込んだ。

おそらく、何かしらの評価だろう。ここに来るまでで、初めての行動だ。

一瞬、凍りつくイツカだったが、セブエルがすぐに書類から顔を離したことで胸を撫で下ろす。

「で、では、次の場所に行きましょうか。今日のメインになる場所で、私に追加された三つの機能すべてを使つている、最重要施設です」

「ムツキ殿の収容施設、ですかな？」

イツカはニヤリと、口の端を吊り上げた。三日月形の口元が、妙に板についている。

「ご明察です。では、ご案内します」

そう言うと、イツカは再び前に立ち、歩き始めた。

やつて来たのは、コア保管庫の前室と同じ、四角いだけの部屋であつた。

ただ、奥には扉もなく、ゴーレムも一体しか置かれていない。

全長は二・五メートルほど。かえる蛙をモチーフにした頭部を持つ、金属と石材のゴーレムだ。

人と変わらない二本腕一本脚ではあるが、その体格は異様なまでに立派だつた。

腕は膝より下まで伸び、すこぶる太い。指は金属製の鉤爪くわづめで、とても頑丈そうだ。

「これは実験用の試作ゴーレムで、キヨウジくん命名、『ヴォジヤノーラ』です。いろいろと機能を詰め込んだ、高性能試験機しけんぎつてやつですかね。これが、今の収容施設の門番代わりです」

「ほお！ 試作機のぞみき、ですか！ それは興味深い！」

興味深げに覗き込むセブエルを見て、イツカはニヤリと笑う。それからヴォジヤノーラと呼んだゴーレムの隣に立ち、その表面をペチペチと叩いた。

「コイツに仕込んだ機能の一つが、私の新しい能力です。トラップなので、コイツ、といふか、コイツの着ている鎧に仕込んだもの、って言うのが正確なんんですけどね」

「鎧にですか？ 確かトラップというのは、床などに仕掛けるものでしたな」

「そうです。ただ私の場合、罠のようなものだけでなく魔力を消費して、魔法的な現象を

起こさせるものすべてがそれに相当します。それなりの面積のある場所に設置して発動します」

そう言うと、イツカはヴォジヤノーラの腹の部分を叩いた。すると、その部分にうつすらと円形の光の線が浮かび上がる。

「コイツの腹には、爆発する火球を飛ばすトラップトランプ、が仕込んであります。一発撃つと魔法陣どころか、ゴーレムに付与した魔力もごつそり使っちゃうんで、すぐエネルギー切れになるんです、が」

「先ほど言つていましたな。ダンジョンの中でならば、すぐに補給ができる」

「えくせれんと！ そのとおりです。ダンジョン内に居る限り、コイツは『爆発する火球』を飛ばせる魔法使いさんと、同じ働きができる。ただ、魔力消費が激しいんで、やりたくないでないんですけどね」

肩を竦めて、イツカは自嘲氣味じちうぎみに笑う。

大型の魔獣を絞めるための場所をダンジョン化することによって、魔力が確保できるよ

うになりはした。大型の魔獣から得られる魔力は膨大なものになる。

とはいっても、魔力は様々な用途を持つ、ダンジョンの基礎になるエネルギーだ。

節約できるなら、それが一番なのだ。

「で、それと同じ流れで、本来地面に設置するような新機能の一つを、コイツに仕込んだわけです。まあ、地味なんですが……ジャビコ、返事よろしく」

「了解しました。初めまして、セブエル・ブラハン百人長。私は、ダンジョンマスターを補佐する外部能力装置、ジャビコです」

その声の元は、ヴォジャノーライであった。正確に言うなら、ヴォジャノーライの頭部だ。

「今までゴーレムの目を通して映像を確認してきたんですが、音声をやり取りできませんで

した。それが、新しくゲットした能力で可能になつたんですよ。壁とかに、直径二十セン

チ程度の円形を描くと、それを通して通信ができるんです。ただ、ダンジョン内だけに限

りますが」

「なんと！ ダンジョン内なら通信が可能ですよ！」

大きく頷いているイツカに、セブエルは唸りながら腕組みをする。

この世界には、情報通信として「遠話」という魔法能力があつた。軍人であるセブエルは、こういったものの重要さ、恐ろしさを身に染みて知っているのだ。

「確か、入口のゴーレム置き場も、ダンジョン内と認識されたな」

「はい。ついでに、施設を含め牧場全体と、コウシロウさんの店とかハンスさんの駐在所

とか、街の一部もダンジョンにしてあります」

イツカのダンジョンは、敵を誘い込み内部で倒すことを目的とするものだ。

事情を知るセブエルには、その恐ろしさがよく理解できた。たとえば魔石採掘現場のように魔力が濃い場所では、「遠話」や「千里眼」などといった能力が阻害される傾向にある。コウシロウ並の余程の使い手でもない限り、イツカのダンジョンの中では「遠話」も「千里眼」も使えない。

つまり、敵にハンディキャップを背負わせた上で、イツカはダンジョン内部を見渡せ、距離を置いての通話を可能なのだ。有利、などというレベルではない。

「もし城塞都市のような場所をイツカ殿が手に入れれば、それを奪うのは相當に難しくなるでしょうな」

その言葉に、イツカはぎょっとした顔になる。慌てた様子で、両手と顔を横に振りまくった。

「いやいやいや！ 私は天下国家に楯突くつもりなんて微塵もないですよ!? そりやもう、法の下僕！ 三回まわってワンとか鳴いやうレベルで！ はい！」

「はつはつは！ もののたとえです！ まさかそのようなことを疑つてなどおりませんと も！」

「あ、あははは！ もう、心臓に悪いなあ……」

立ち読みサンプル はここまで